

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻118号 平成25年9月1日発行

「修身教授録」探求（第八十三回） 我が国の使命

森 信 三

◇国家の存立とその固有の使命

この前にも申したように、我々は一個人の間としても自己の使命を自覚しない間は、その人の生活は未だ真に充実したものとはいえないのであります。そうしてここに個人としての立志の重大なる意味があります。しかしこの事は、国家に於てはより一層適切に当てはまるのであつて、即ち一つの国家がこの地上に出現したということは、必ずやそこに独自の使命が存す可きはずであります。即ちその国家国民の力に依らなければ実現出来ないところの使命が存すべきであります。かくして国民各自にとつて最も大切な事柄は、自己の属している国家の使命が如何なるものであるかを自覚するということである。否一步を進めて考えれば、そもそも個人の使命というてみても、実は国家の使命を背景として始めて成り立つものであります。即ち個人の使命というものは、自己の属する国家の使命を自己独特の角度からその実現に貢献せんとするの謂いに外ならぬからであります。それはあたかも円周上から円心に至る半径はそれぞれその角度の違うように、ひとり一人国民が国

家の為に貢献する角度はそれぞれ違うのであり、又違うべきであります。そうしてかく自分が国家に貢献する唯一独特の角度、即ち何人も替わることの出来ない自己独自の角度を見出すことが、即ち個人の使命の発見でありその自覚に外ならぬのであります。

◇我が国の使命

今このように考えて来ますと、我々人間はどうしても先ず自己の志を立てなければならぬのであつて、もしそうでなかったならば我々の人生は空しく終るの外ないのであります。が、しかもその志を立てんが爲には我々は翻（ころ）つて我々日本国家の使命が何処にあるかを考えなくてはならぬのであります。然らば我が国の使命如何というに、今これを最も遠大な立場に立つて申すならば、我が国の使命は我が国独自の国体を基礎として、全世界の有色人種を白人の圧迫下より救い出そうとする外ないのであります。しかもその爲には、何よりも先ずその足場として亜細亜十億の同胞をして真の自覚自立に導かなければならぬのであります。そうして我が国が今国力を挙げて戦いつつある支那事変は、実にかくの如き遠大なる我が日本国家の使命実現の第一歩たる意義を有するのである。同じく亜細亜人種

であり、殊に同文同種であつて歴史的にもその関係深き日支両国民が、今日血を流し骨を削つて互に相戦わねばならぬと云うことは、一面実に非痛な極みであります。しかも彼が白人の魔手に操られて我が国の抱懐するこの宏遠なる大理想を解せず、これが実現のために提携しようとしないうのみか、却つて彼等に操られて我に対して挑戦し來つた以上、伝家の宝刀遂に鞘を仏わざるを得ないのであります。

◇「聖戦」である理由

かくの如くであるが故に、我々は今日我々の戦いつつあるところが、如何なる意味に於て「聖戦」であるかといふことの真意義を深く掴まなければならぬのであります。所謂インテリと称せられる知識階級の一部に於ける「支那の立場になつて見れば又それ相應の言分もあるだろう」などという言葉は、真に自らの自主性に立つて世界の状況を大観する能はざる無力なる寢言に等しいのであります。否インテリのかくの如き態度は、所謂敗戦主義とその本質に於て何ら異るところなきものである。諸君は何よりも先ずこの点を明確に掴まなければならない。そうして我が国が今日ここに多大の犠牲を払いつつも、徹底的に

戦はざるを得ない所以を確認しなければならぬ。けだし今回の戦いが徹頭徹尾「聖戦」であり得るのは、実にこの戦が全亜細亞民族を、否やがては世界の全有色人種をして、白人の圧迫下より解放自立せしめんがための第一歩なるが故であります。然るに眞の識見を欠き、従つて又氣魂を欠く所謂インテリと称せられる人々は、従来人類愛とは平和の謂いであり、而して平和とは現状維持の立場に至つて戦を忌避することであるかのように思ひ來つていたのであります。然るに現状維持を以て平和と考えるのは、実は世界十億の有色人種が、その幾分の一にも足りない少数人種たる白色人種によつて圧迫搾取の限りを悉くされている現状に対して何等の義憤をも感ぜず、従つてこれを救済せずんば已まぬという眞の大愛を起さざるが故であります。即ちかくの如きは人類に対する眞の博大なる愛をもたないのみか、それを実現せんとする勇氣を持たない怯懦の無自覚的表現というべきであります。さればもし眞に世界の大勢を洞観するならば、この暴逆極まりなき白人に向つてその膺懲の一撃を加えることこそ、眞の人類愛実現の第一歩たることを知るのであります。

実に世界十億の有色人種中、嘗て白人の

凌辱を蒙らなかつた民族はひとり吾々大和民族あるのみであります。諸君はすべからずこの世界史の大事実に対して、改めて活眼を開いて見直さなければならぬ。即ち天が亜細亞の東海中に我々日本民族を生み、一系の聖天子を仰いで、白人はもとより未だ嘗て如何なる民族に依つても侵犯凌辱せられしことなき光榮ある歴史を築き來つたことの神意を拝察しなければならぬでしょう。この事は、地球上に於ける最少人類である白色人種が、最多人種たる有色人種に対して圧迫凌辱を加へつつあるその重圧を除去するという事は、実に神によつて吾々日本民族に下し給へる唯一にして又最高なる使命たることを証するものであります。故にもし吾々日本民族なかりせば、この地上は永遠に白色人種の暴逆の持續の外なかつたでありましょう。

◇眞の教育者とは

このように吾国の使命は実に宏遠極りなきものであります。しかもその実現たるや決してこれを容易なりとすることは出来ないのであります。世界はおろかわが亜細亞の天地のみについて見ても、一切白人の勢力を駆逐し去るということは必ずしも容易とはいえないでしょう。いや日支の提携すら前途尚多大

なる困難の克服を覚悟せねばならぬのであります。しかもかくの如く考えて来るならば、諸君が今やその二度とない人生を国民教育の大道に踏み出したということは、私をしていなしむれば、諸君は日本人として最も意義ある人生の道を選ばれたものと言わざるを得ないのであります。けだし第二の小国民に宏遠なるわが皇国の使命を吹き込み、而して各自如何なる角度よりこれに貢献せんとするか、この自己の使命感の自覚に火を点ずるということは、実に国民教育者の任に外ならないからであります。しかも諸君、そこには一つの重大な事柄の閑却かんかくされていることに気付かなければならない。それは相手の魂に火を点ぜんとする者は、何よりも先ず自らの魂に火が点ぜられていなければならぬということである。自ら燃ゆることなき者、いかでか相手の魂に火を移すことが出来ましょう。然らば諸君にとって最も大切な事柄は、何よりも先ず諸君自ら自己の魂に火を点ずることではなくてはならない。而して魂に火を点ずるとは、畢ひつぎょう竟道を聴くことによつて一切の過去を振り捨て、新たな人生の一步を踏み出すことの外ないでありましょう。

(先生授業の終わりに臨みて)

私が諸君に希望することは、二宮尊徳翁や

吉田松陰先生が、もし今日の時代に於て国民教育界に身をおいていられたならば、一体どういう生き方をされるか。それを追求して考えてみるということです。それさえハッキリすれば、諸君の信念はいやが応でも確立してくるでしょう。自分の生涯を道に従つて生きて見ようとして道に命を賭ける……これが古来偉人と呼ばれる人々に一貫する生き方であります。

私が諸君にこの一年間修身の話をするのは、諸君に真実の教育者になつて貰もらいたいからです。そうして更に出来得べくんば、諸君の中から教育的偉人と呼ばれるような人が出てほしいのです。少とも諸君に古今の教育的偉人といわれる人々の真の偉さの分る程度の人間になつて貰もらいたいです。これを換言かんげんすれば、「諸君は吉田松陰先生の従しゆ容ようとして死するを得た所以、即ち又大楠公の「七生報国」の大精神を次代の小国民に伝えるため、最も意義ある生き方をしなければならぬ。とにかく人生は二度ないんですからね。お互いにかような事をいつている間にもいのちのローソクは刻々に短くなつてゆくのです。(工藤勝男記)

(修身教授録三) 昭和18年9月1日同志同業社刊

「アインシュタイン博士に」(微言)

森信三

○アインシュタインはアサヒグラフの原爆被害特集号を見て「日本国民への釈明」を送つてよごしたが、その中で自らを絶対の平和主義者だと言っている。だがこの一事のうちに今日人類の全問題は含まれていると思う。

○彼は自分が原爆の生産に當つて関与したのは唯「原爆生産の可能性を調べる爲め大規模な研究を行うべき旨を大統領に進言したことだけだ」と言う。だがそれだけで既に十分ではないか。

○しかも彼はこの試みの成功の曉、その人類に及ぼす絶大な危険については十分に承知していたのであり、唯彼はドイツも原爆製造をするかも知れぬから……という唯それだけの理由で、この人類破滅への引金をひいたのである。

○その上彼は言う「私の考える処では戦争における殺人行爲は、一般の殺人行爲と何ら異なる処はないと思う」と。

何故に彼は「だが一般の殺人行爲は大抵は一人、多くとも数人の殺傷に過ぎないが、戦争とくに原爆戦では、一弾よく幾十万人を殺傷する」と付言しないのか。

○彼は更に言う。「現代における最大の政治

的天才ガンジーは、人間が正しい道を知りえた場合、如何に大なる犠牲に耐えうるかを実証してくれていると」。

○「ナチスによって祖国を追われた彼が、ドイツに対して抱いていたであろう憎悪の念が分らぬわけではない。だがアインシュタインともあろう人が、どうして「ドイツでも原爆を造るかも知れぬ」という程度の動機から、原爆生産の大規模研究を教唆……好ましからぬ言葉ではあるが、この場合言葉を使う外ない……したのであろう」。

○ガンジーの絶対無抵抗精神の偉大さを認めているアインシュタインにして、何故に原爆生産の引金を控えることができなかったのか。ここに吾々は彼という一個人の上に現れた「人類の宿業」を窺う。

○最後に彼は言う。「ガンジーが成し遂げた仕事は、精神の力が、見絶対優位であるかに思われる物質力よりも強いことを立証する生ける証拠である」と。この一言は人類の悲劇的矛盾を背負いつつ、これを克服しえない「碩学」の完全なる屈服という外ない。

○以上はアインシュタインを罵るために記したのでは決していない。そうではなくてアインシュタインという一個の「碩学」……何といつても彼は今日やはり碩学の名に値する……

によって象徴せられている人類の「悲劇的矛盾」を、改めて明かにしたいからである。

○人類の「悲劇的矛盾」とは何であるか。原爆戦が人類の半壊滅的破壊を招来すべきことが分つていながら、人類全体が……口や筆ではかれこれ言いつつ……その方向へ向つて事実的進行を爲していることを言うのである。

○もし人類にして真にその意志があるなら、たとえ原爆は造られても即時戦争を廃棄することは決して不可能ではない。それにはかねて言うように①世界軍備の全解除②国境の即時撤廃③世界資源の全解放の三條件の即時実行あるのみ。然るにこの明瞭瞭事が断行できない処に私は「人類の宿業」を窺うものがある。アダム・イヴの原罪を嘲笑しうる人間は、今日といえども地球上に一人もないはずである。 (開頭) 昭和27年12月号通巻65号

あとがきに替えて

シナ事変については正しい歴史認識をすべきかと思う。日本が侵略したということは少なくともシナ事変勃発の当初は皆目なかったはずだ。その後もなかったと信じたい。中国という複雑怪奇な権力構造基盤を、日本がよく分かってなかった嫌いがある。残念なことに、よかれと思って兵を増派し、ずるずると戦火が拡大していったのだ。

残念ながら三条件の即時実行など夢又夢の世界に今日あるは明瞭明白なことである。加えて森信三先生が仰言る「人類の宿業」がまたまた繰り返されるといふ恐れなしとしない現実世界を認識したとき、愕然とするのは愚生一人か？エジプト五千年の文化遺産はかくも薄っぺらなのか？同様に中国文明も中東文明もしかりと言えそうである。一人日本のみ黙々と全世界の文化を吸収・引き継ぎ・再構築して今日がある。有史以来世界文化の融合せる国家創りをすすめて来て今日がある。我々はこの文化遺産を新しい国際標準とすべく、新世界の秩序創造に寄与すべきではないか。それには先ず日本が、本来の日本たるべき確固たる国造りの自覚を、国民レベルで決意することが先決であらう。

(29日二纂)

第122回「かよう会」のご案内

日時 平成25年9月17日(火)
18時30分～(毎月第三火曜日原則)
場所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』
「電話」(四ツ橋ビル 管理事務所)
06-6531-3686
交通 地下鉄：四ツ橋線四ツ橋駅下車
2番出口へ。歩30秒
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との
連絡口で直結。

テキスト 森 信三著「修身教授録」(致知出版)
2300円(大きな書店で購入)
9/17日 長所と短所
10/15偉人のいろいろ
11/19伝記を読む時期

参加費 1000円